

## 「鉄砲の戦い」の謎

# 設楽原の大繩銃はどこから？

設楽原まもる会会長 小林芳春

天正三年五月、勝頼の長篠城攻めで始まった設楽原の決戦は、「鉄砲の戦い」として知られているが、使われた鉄砲（火繩銃）の実態は謎が多い。

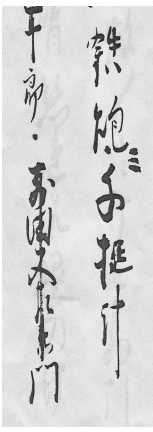
### 1 決戦の鉄砲の行方は？

決戦で使用された火繩銃の行方は、未だに全く分かっていない。つまり当時のものは残っていない。

「天正十一年」の記銘のある龍源院砲や歴史資料館展示の宗賢寺砲（信玄砲）を含めて、戦国期の銃は全国で数挺のみである。

### 火繩銃の数

千とも三千ともいわれる設楽原に持ち込まれた火繩銃の数は、文献に織田方の数として記されているが、決め手はない。ただ「た



千とさん」ということだけは確かである。当時、信長の側近を務めていた太田牛一がまとめた『信長公記』の中に、

「鉄砲三千挺計（ばかり）とでてくる。

（この上二の書き方が問題になるが、「数の多い」ことは明白。

徳川方や武田方の鉄砲については信頼できる鉄砲の記録がない。

### 2 鉄砲の使い方は？

決戦の鉄砲について、『信長公記』は五か所記している。（原文のまま）

- ・「御下知（命令）次第可仕之旨」
- ・「鉄砲を以て、散々ニ打立られ」
- ・「御下知之如く鉄砲にて、過半うたれ」

・「鉄砲にて待請うたせられ」

・「鉄砲計を相加、足輕にて…」

武田軍との衝突の記述はこれだけである。（ここで「御下知」の文字が二回でてくるが、下知の本身は謎である。

武田方からの記述である『甲陽軍鑑』（品14）は、次のように記す。

・「大將ども尽鉄砲にあたり死する」

鉄砲の連続的使用で、武田軍が大打撃を受けたと、『信長公記』を裏づけている。

公記の記述は、決戦の実像に近いと思われる。

### 3 鉄砲を「どこ」から？

織田軍の準備した大量の鉄砲が、「どのように調達されたか」に関連する、二つの史料がある。

#### ①秀吉の国友藤一 郎宛文書

・「百石令扶助候：鉄砲儀、不可有  
如前々相違候」と、百石の知行を  
与え、鉄砲の製作を命じている。

（天正二年八月、設楽原の前年）

#### ②秀吉の堺商人今井宗久宛文書

・「火急之用候：てつはう薬二十斤  
程並んせう三十斤御調候て可  
給候…」（元龜元年六月、姉川の  
戦直前） ※てつはう…鉄砲

何れも藤吉郎秀吉を通してのものであるが、当時の織田軍が堺や国友の鉄砲鍛冶に火繩銃を製作依頼し、火薬については堺の商人から輸入品を求めていたことを示す資料である。

堺のような港町を持たない武田軍にとつては、輸入火薬に頼る火繩銃の大量使用は困難であったといえる。

#### ③奈良興福寺の『多聞院日記』

・「十七日 岐阜へ筒井順慶 ヨリ  
テツハウ衆五十余合力ニ被遣之、  
各々迷惑トテ悉妻子ニ形見遣出  
アワレナル事也ト云」

信長の出陣要請に応えて、各地の鉄

砲衆が数十人単位で参加している。

◇ ◇ ◇

種子島への鉄砲伝来から設楽原の鉄砲までに、三十二年が経過した。これを、明治の鉄道や家庭用電灯の国内普及と比べると

・大海駅開業：新橋駅（日本最初の駅）  
から二十八年目

・東郷の電灯：鹿鳴館初めての電灯  
から二十五年目

となり、戦国時代の技術普及の早さに驚く。しかも、火薬

（特に硝石）や玉の鉛はほとんどが中国や東南アジアから輸入されていたという。輸送手段も物流システムもきわめて貧弱と思われる時代のことである。

さらに、銃口径と玉の直径差は四％、玉と銃身のすき間はわずかにコピー紙二枚分である。銃身内部での火薬の爆発を最も効果的にするスキ間の技術が確立されていた。

火繩銃を支えた技術は、私たちの想像以上に科学的であり、技術革新の役割を果たしてきたのである。

